

Ernest Hemingway と 宗 教

宮 田 満 雄

一個人の宗教、特にその信仰内容を、第三者が論ずることは一般的に考えて非常に困難なことである。特に Hemingway のように、思考より行動、精神より肉体といった面に強調点を置き、神不在の文学において重要な役割を果たしていたと見なされる作家については尚更である。一般に Hemingway の宗教的な側面については、否定的な側面から考えられてきているが、この小論においては、彼の人生観、世界観と、幼い時から養われてきたキリスト教的薫陶が如何なる関連をもつものであるかを作品と伝記の事実とを通して肯定的な側面から考察したいと思う。

I

Hemingway was a religiously oriented man whose tempered faith was forged within the framework of an American Protestant tradition, hardened by the disillusionment of war and the 1920's, and annealed within the framework of a broad, ancient Catholic tradition, constantly being tested for its tenacity and possessing the properties essential to a universal belief ¹⁾

とある如く、Hemingway は、幼い時から強い宗教的 雰囲気の中で育てられた。彼の母方の祖父 Ernest Hall は、非常に敬虔な信者で Grace Episcopal Church に属しており、日々の祈禱を欠かさず、Hemingway 一家からは Abba と呼ばれ、一家の宗教的支柱となっていた。²⁾

父方の祖父 Anson Tyler Hemingway は、これ又大変熱心なクリスチャンで、当時米国において活躍していた伝道者 Dwight L. Moody とも親

交のあった人であった。彼は、一時 YMCA の総主事の地位にあって、青少年の教育活動に徒事し、家庭内にあっても宗教的なしつけの厳格な人であったと言われている。³⁾

又、両方の側の祖母二人も、その時代に相応しい信仰を持った人々であった。かくして Ernest の父、Clarence E. Hemingway も又その薫陶を受けついで、第三組合教会では日曜学校の教師を勤め、Oak Park 及び Chicago 近辺において慈善的な医療活動をつづけた。彼は、子供のしつけについても厳格で、一家団らんの中であっても子供達の言動については注意深く、しばしば体罰を与え、罰を加えたあとには子供達をひざまづかせて神に赦しの祈りをさせた。⁴⁾

更に、彼は19世紀から20世紀にかけての自然科学的発展の著しい風潮の中にあつて、これら科学的知識と聖書のおしえる内容についての関連についても細かい配慮をしたようである。彼自身は医者であり、又博物に深い造詣をもつ人であったため、子供達にもこの点に関する指導を忘れなかった。

Daddy always made a point of explaining to us that though God created the world in seven days, according to the Bible, and we were not to doubt that statement, nobody had even explained how long a day was. He also told us that the men who wrote the Bible explained natural history the best they could, but that now through research we knew much more about how things must have been made thousands of years ago. He told us that our new knowledge only

1) Julianne Isabelle, *Hemingway's Religious Experience*, Vantage Press, New York, 1967, p. 17.

2) Cf. Marcelline Hemingway Sanford, *At The Hemingways*, Atlantic-Little, Brown, Boston, 1962, p. 4, 14. Abba とは聖書の中に出てくる「父」という意味。

3) Cf. *Ibid.*, p. 18.

4) Cf. *Ibid.*, p. 31.

added to the truths we learned in Sunday school.⁵⁾

と Marcelline が回想している如く、彼は、新しい知識の世界と信仰の世界が、矛盾するものとして考えられるべきではない事を子供達に教えた。このことは、彼の聖書に対する態度が、時代の流れに沿って fundamental なものから liberal なものへ移行していった様子を示すものとして興味深いところである。しかしながら、一方、彼はダンス、トランプ、喫煙、飲酒等についてはピュリタンの禁欲主義者であった。しかし母親は、このすべてについて父親とかならずしも同意見ではなかった。⁶⁾ このあたりにも、父母がそれぞれ育った環境の違いが表われていて興味深い。

母親はよく知られているように、音楽に豊かな天分を示した人で、教会では聖歌隊を指導し、又家庭内にあっては父親同様しつげに厳しい人であったことが記されている。

このような環境の中で Ernest は幼少期をすごした。毎食事の感謝は欠かすことなく、⁷⁾ 聖日礼拝には一家そろって出席し、⁸⁾ 又高校になると聖書の暗誦をし、といった具合である。このように幼少時から受けた宗教教育及び薫陶が、如何なる形で彼の心の中に残っていったかという点に筆者の大きな問題と関心がある。

Hemingway 自身は、彼の育った Oak Park の環境を全面的に受け入れていたわけではなく、むしろ、"tasseled Victorian blinds of Oak Park"⁹⁾ と言われる genteel なこの社会に対して返逆をおこすわけである。Benson は、若き Hemingway の人生観や作品が、唯単に戦争の苦しい経験から突然に生まれて来たものではなく、

それは、Oak Park の世界と戦場における経験との鋭い対比によって次第に蓄積されて来たものであると述べている。¹⁰⁾

Oak Park の世界は、我々が想像する以上に Hemingway の内面に大きな問題を投げかけていたようで、弟の Leicester も次のように述べている。

But the fact that he was a child of God besieged by a welter of familial and personal problems is either forgotten or overlooked by most students of his work and life.¹¹⁾

Philip Young も、もし Hemingway が自分の作品を書き変えるとしたら、それは両親のことであろうと述べ、更に、

Their Victorianism was so preposterous—so, too, their lack of understanding—that as a context for his general rebellion the family now looks bigger than the war.¹²⁾

と記し、家庭問題の重大さを示唆している。

Hemingway が、伝統的な Victoria 時代の感覚に反逆したということは、現代的視点から見ると、むしろ当然のことであろう。しかし、何と言っても、彼の精神生活に大きな影響を与えたのは戦争参加の経験であり、この経験が彼と家庭との間の溝をより深く、大きくしたと考えられる。

II

この大きな経験を通じて彼が何を感じ、又それを基礎にして世のすべての事に対して如何なる反応を示したかと言うことは、数々の作品を通してうかがうことができる。

5) Ibid., p. 38—39. 点線は筆者。

6) Cf. Ibid., p. 39.

7) 食前の祈りは、"For what we are about to receive, may the Lord make us truly thankful, for Jesus' sake, Amen." であった。子供達は、これを早口でごまかし、たびたびやり直しを命じられた。(Ibid., p. 14)

8) 1915年の秋には、第3組合教会から第1組合教会へ移り、そこには Hemingway 家の指定席が用意されていた。(Ibid., p. 147) Ernest, Ursula, Sunny は、この牧師 Dr. William E. Barton から洗礼を受けている。

9) Jackson J. Benson, *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, U. of Minnesota Press, Minneapolis, 1969, p. 3.

10) Cf. Ibid., p. 4.

11) Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, The World Publishing Co., Cleveland, 1962, p. 14.

12) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, Pennsylvania State U. Press, Univ. Park and London, 1966, p. 274.

‘Soldier’s Home’ の Krebs の物語りは、戦場から帰還した Ernest の心情を美事に描き出している。彼が故郷に帰還した時、人々はすでに戦争の話には飽きてしまっており、脚色を加えた話に対してでなければ、もはや興味を示さなくなっていた。彼の帰還そのものが、すでに ‘ridiculous’ と考えられていた。彼自身は、戦争によってすべてを失った傷心を抱いて帰還したのだが、故郷の町は旧態然としており、変わったことと言えば、唯若い娘達が成長した事だけであった。彼が帰還後、戦史をむさぼり読み、これに強い関心を示したのも、自分が命をかけて参加した戦争というものが、一体何であったのだろうかという総括をせざるを得なかった彼の追いつめられた心情を示す何ものでもなかった。そしてその中で、自分が立派な兵士であったのだという実感を味わった。この死んだような故郷に帰り、すべてのものから疎外されている自分にとっては、そう実感することが重要なことのように思われるのであった。つまり、戦場を回想することによってのみしか自分の identity を確かめることができない悲しい立場が示されている。母親の配慮も、かえって Krebs を苛立たせる結果となる。

‘Have you decided what you are going to do yet, Harold?’ his mother said, taking off her glasses.

‘No,’ said Krebs.

‘Don’t you think it’s about time?’

His mother did not say this in a mean way. She seemed worried.

‘I hadn’t thought about it,’ Krebs said.

‘God has some work for every one to do,’ his mother said, ‘There can be no idle hands in His Kingdom.’

‘I’m not in His Kingdom,’ Krebs said.

‘We are all of us in His Kingdom.’

Krebs felt embarrassed and resentful as always. ¹³⁾

上文に見られる如く、ここには母子の考え方に

根本的な断絶が存在している。Krebs は、戦争に出かける前は Methodist の大学に在学していた。母親の言葉からも明らかなように、伝統的な信仰を重んずる家庭に育って来た。かつては彼も素直に心の中に神を覚え、教会の活動に積極的に参加していたことであろう。しかしながら、戦争における経験は、宗教や信仰等の問題を根底からゆさぶったようである。‘A Natural History of the Dead’ には、信仰の問題について明瞭な一つの視点が描かれている。それは、従来の信仰の問題について、Hemingway 自身が示した深い疑惑であり、反逆であると考えてよいものである。

アフリカ砂漠の中で唯一人力尽きて倒れ、死の時を待つばかりになった旅行家 Mungo Park はその時自分の目にうった名もない花を見て、このような小さな植物にすら神の配慮が加えられているのであるから、まして、神の姿に似せて創られた人間を、神が見捨て給う筈はないと深く感じ、その信仰の力によって、彼は再び生きる力を与えられ前進して救われたという話を冒頭にかかげ、死臭の中に死体が散乱している凄惨な戦場にもし Park が立ったならば、「炎天下の戦場に自己の信念を回復してくれる何物を見出すだろうか」と述べ、¹⁴⁾ 更に、‘...few travellers would take a good full breath of that early summer air and have any such thoughts as Mungo Park about those formed in His own image.’ と痛烈に批判するのである。

おそらく Krebs も、これと同様の体験を持ったことであろう。そのような人間にとっては、母親の語る「神様は…」と言う語りかけは、何ら共感を湧かすものでもなく、それはむしろ、‘embarrassing’ なことであり、‘resentful’ なことでしかないのである。¹⁵⁾ 語り終えた母親に対して、彼が語り得たことは、‘Is that all?’ ¹⁶⁾ という冷やかな言葉であり、更に、‘Don’t you love your mother, dear boy?’ ¹⁷⁾ という母親の頼みの綱とも言うべき質問に対しても、‘No, I don’t love anybody.’ ¹⁸⁾ という返事しかできない彼であっ

13) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p.142.

14) *Ibid.*, p.416. ‘One wonders what that preserving traveller, Mungo Park, would have seen on a battlefield in hot weather to restore his confidence.’

15) Cf. *Ibid.*, p.142. 本稿註13) 参照。

16), 17), 18) *Ibid.*, p.143.

た。彼として本心ではなかったにしても、(I don't mean it.) 無性に腹が立ち、そういう形でしか返答ができなかったのである。又、母親の側にも彼の苦悩を押し測るすべもなかった。最後に、母親は彼の為に祈るが、その空虚さは読む者に索莫とした感情を味あわさずにはおかないものである。

このような Krebs の深い傷心は、'Big Two-Hearted River' の Nick の傷心に通じるものであり、又、Hemingway 自身の帰還後の北ミシガンにおける生活も、このような点から考えるならば、十分理解できると思う。

Krebs を理解できなかった母親同様、Hemingway の父親も又、息子を十分に理解できなかった点があった。1924年、パリの Three Mountains Press から *in our time* が出版された時、父親は喜んで6冊程注文した。しかしながら、期待に胸をふくらませた両親は、作品を読んだ時非常なショックをうけた。妹の Marcelline は、その時のことを、'Both of them, very obviously, were shocked and horrified ...' と記し、更に、

Daddy was so incensed that a son of his would so far forget his Christian training that he could use the subject matter and vulgar expressions this book contained that he wrapped and returned all six copies to the Three Mountains Press in Paris. He wrote to Ernest and told him that no gentleman spoke of venereal disease outside a doctor's office. ¹⁹⁾

と記して、父親の激怒がいかに大きなものであったかを伝えている。

Hemingway の作品は、Genteel America の伝統の真唯中にあった Oak Park では、到底受け入れられるものではなく、家に置くことすらが汚らわしいものであった。²⁰⁾

他の短篇においても、宗教や信仰の問題につい

て懐疑や反逆を示す記述が多くみとめられる。

'The Doctor and the Doctor's Wife' においては、Christian Science の信者である母親よりもそうでない父親に対する好意が示されているし、又、'A Clean, Well-Lighted Place' では、「主の祈り」をもじった有名な「無の祈り」があり、'Nothing is with thee' ²¹⁾ と言うのである。

'The Gambler, The Nun, and the Radio' では、'Religion is the opium of the poor.' ²²⁾ と定義している。

長編に目を移しても、同様の主旨のことは枚挙にいとまがない。*The Sun Also Rises* は、Hemingway のテーマである 'How to live' を追求した作品として理解できる。しかしながら、この作品においては明瞭な解答が示されているわけではない。いわば模索時代の作品と見ることができよう。登場人物はすべて病める人であり、自らの identity を失った国籍喪失者である。世のいとなみは、すべて空しいという考え方が全編の基調となっている。

A Farewell to Arms においても、Henry は、犠牲というのはシカゴの屠殺場に似たようなもので、栄光なんてあったためしはないと思う。そして、栄光、名誉、勇氣、高德などという抽象的な言葉は、村の名、道路の番号、川の名等のような具体的なものと並べると、不潔な感じがすると言っている。²³⁾ Greffi 伯は、アイロニカルな調子で、'I had expected to become more devout as I grew older but somehow I haven't' ²⁴⁾ と述懐する。

出産の為に入院する Catherine は、受付のデスクで帳簿を記入してもらった時、「宗教なし」と言い、係りの女はその欄に線をひくのである。²⁵⁾ 子供の死産を知らされた Henry は、自分も無宗教であると考えている。²⁶⁾

For Whom the Bell Tolls は、前の二つの

19) *At the Hemingways*, p. 219.

20) *Ibid.*, p. 219. 'He would not tolerate such filth in his home, Dad declared.'

21) *The First Forty-Nine Stories*, p. 355.

22) *Ibid.*, p. 450.

23) Cf. *A Farewell to Arms*, Jonathan Cape, London, 1953, p. 186.

24) *Ibid.*, p. 264.

25) Cf. *Ibid.*, p. 314.

26) Cf. *Ibid.*, p. 325.

長編とは異なり、人間の権利、義務の問題を強調しているように思われるが、²⁷⁾この作品でもやはり、宗教に対する懐疑を示す個所が多く見出される。Anselmo は当惑げに、「もう神も聖霊もない」と言い、信心の中で育っていながら神がはっきり見えない今となつては、すべての責任を自分で持たなければならないと述懐する。²⁸⁾

Pilar も、‘Before we had religion and other nonsense.’ と言い、Pablo は、公会堂で地主や牧師を虐殺した時、牧師の死際に幻滅を覚える。²⁹⁾ 又、Jordan は ‘A good life is not measured by any biblical span.’ と断言する。³⁰⁾

殺された若い騎兵のポケットにあった手紙には、妹からの信心深さがあふれる文面が記されている。その手紙を読む Jordan の足下に、その若者は妹の加護を求める祈りも空しく冷い死体となって横たわっている。³¹⁾ Anselmo の、‘If there were God, never would he have permitted what I have seen with my eyes.’³²⁾ と言う素朴な疑問が読者の心に伝わってくる。

このように見てくると、Hemingway の作品には非常に強い宗教に対する否定的なヴィジョンが描かれているということが明らかとなる。19世紀以後の宗教的権威が失われ、機械的宇宙観の支配する世界という文脈において Hemingway の作品を考えるならば、彼も又時代の子であり、その時代的特長と現代の問題性を見事に書きあげたと言えるであろう。神不在の文学の旗頭とも言い得るのである。

しかしながら、この小論における目的は、この問題を反対の側面から吟味して、はたして Hemingway 自身が一般に考えられているように、本質的に反宗教的な人間であったかどうかを考察する点にある。これまでに述べて来たような面から考察を進めるならば、「Hemingway と宗教」と言う主題についての結論は、自明なものとなる

う。しかし、筆者はこのまま anti-religious の方向で Hemingway を考えるわけにはいかないと、いう気持ちを拭い去ることができないのである。

III

Hemingway の作品には、上述の反宗教的な記述のほかに、宗教、信仰、教会、キリスト、罪、祈り、聖母、神父、等々、キリスト教に関係のある事項が奇妙に交錯してあらわれる。そして、それらがすべて宗教に対するアイロニーを示しているわけではない。又作品の中で小道具的な機能をはたしているというだけのものでもない。それらは、何か作者の精神的苦悩や模索の断面をのぞかせているように思われてならないのである。

‘A Very Short Story’ の「彼」は、従軍看護婦の Luz と恋仲になり結婚しようと思うに至る。二人は教会堂へ行って祈った。二人はこの決心が変らないことを願い、又、自分達のことを皆にも知ってもらいたいと思った。そうすることによって自分達の結婚が失われないようにするためであった。このようにして自分達の結婚の意志を神と人との前に表わした二人であったが、「彼」が米国に帰国したあと、イタリヤ人の大隊長が Luz に言い寄って来て、彼女の心は変るのである。この小編の結びは、「彼はタクシーにのってリンカーン公園を走っているうちに、あるシカゴの百貨店の女店員から淋病をうつされたのだった。」となっている。³³⁾

又、その次に出てくる interchapter では、Fossalta で塹壕が激しい砲火を沿びている間中必死になってイエスに祈った兵士が、翌日の夜はケロリとして売春宿に出かけて行く。但し、彼はイエスの事は誰にも決して話さなかったのである。³⁴⁾

この二つのスケッチを主題に沿ってどのように解釈するか。見方によれば、これこそ教会やイエスに対する冒瀆だと考えられる。両者とも祈りの

27) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 8, 19, 45, 89, etc.

28) Cf. *Ibid.*, p. 43.

29) Cf. *Ibid.*, p. 125.

30) *Ibid.*, p. 164.

31) Cf. *Ibid.*, p. 285—286.

32) *Ibid.*, p. 43.

33) Cf. *The First Forty-Nine Stories*, p. 133—135.

34) Cf. *Ibid.*, p. 136.

あとで、一方は女にひっかかって淋病をうつされ、他方は売春宿に行くという似たような結末である。Hemingway の父親が、「クリスチャンの教育を受けたものが何たる恥さらしな」と激怒したのも頷けるというものである。³⁵⁾しかし、この二つの作品が唯単に伝統的な宗教や、Oak Park での環境に唾を吐きかけるためだけのものであれば、あまりにも幼稚であり、そう解釈することはナンセンスなことであろう。Hemingway は、もっと深い、人間の本質に触れた経験をした筈である。むしろここでは、従来最も大切なこととして教えられて来た信仰の問題が、かならずしも全能ではなく、たとえ信仰心のかげらがあったとしても、それとは無関係に人間の意志が作用するという人間の弱さを示していると見るべきであろう。Krebs が戦争を通じて感じとったように、これまで教育されて来た如く、すべて神様が最善に導いて下さるという安易なものは世の中にはなく、人間の心の中には、神の国からはみ出して行こうとする力がその本質に存在していることを示しているのである。Krebs はこのことを痛感したに違いない。従って、「I'm not in His Kingdom.³⁶⁾」という言葉が出てくるのである。それは丁度新約聖書において、パウロが、「我が欲するところの善はこれをなさず、かえって欲せぬところの悪はこれをなすなり。」³⁷⁾と云い、更に、「あゝ我れ悩める人なるかな。」³⁸⁾と言ったあの苦悩に通じるものであろう。

A Farewell to Arms における Henry は、Abruzzi へ行けとすすめてくれた司祭を裏切って行かなかった。ある晩の会食の時、司祭の隣りに坐った Henry は、司祭が Abruzzi へ連絡して Henry を迎える用意をさせていたことを知り、いやな気持になる。彼は本当は行きたかったのに、何故行かなかったのだろうと自問し、自分でも訳が解らない。しかし司祭は、Henry が本当は Abruzzi に行く意志をもっていたことを諒解

してくれた。³⁹⁾ Henry は、酒をしたたか飲んで次のように言うのである。

I explained, winefully, how we did not do the things we wanted to do; we never did such things. ⁴⁰⁾

つまりここにも、先述の善なる意志とは矛盾する意志の働きが人間を支配することが示されている。再びパウロの言う「善を欲すること我にあれど、これを行なうことなければなり。」⁴¹⁾という言葉と一致する。Abruzzi という場所がどのような意味をもつかということは、Baker の言をまつまでもなく、Hemingway の作品に親しんでいる者には明らかなるところであろう。従って、この二つの小編から、我々は Hemingway が味わっていた人間の本質に関する彼の苦悩と問題提起とを知るのである。

'A Clean, Well-Lighted Place' も、我々に Hemingway の精神的な克闘を伝えるに十分なものである。80才は越えていると思われる老人の姿が夜の闇とは対照的に明るいカフェのテラスの中に一人ポツンと坐って浮彫りにされている。丁度フットライトを浴びている効果である。老人は静かにブランデーを飲んでいる。この老人にも若い華やい時代があったに違いない。今は老いぼれて、彼を見る二人の給仕もあのようにはなりたくないと思う。老人はかつて自殺を試みたが果せず、人生の残りの道程を黙々と生きている。それが義務であるかの如く。人間のいとなみの空しさが滲み出ている。そして給仕の一人によって、あの有名な Nada の祈りが呟かれるのである。料金とチップを払って立ち去る老人の後姿には、何か威厳さえ感じられる。

The waiter watched him go down the street, a very old man walking unsteadily but with dignity. ⁴²⁾

すべて人間のいとなみは空しいという「伝道の書」の言葉が読者にはね返ってくる。人間には、

35) 本稿註19) 参照

36) *The First Forty-Nine Stories*, p. 142.

37) ローマ書 7 : 19

38) *Ibid.*, 7 : 24

39) Cf. *A Farewell to Arms*, p. 16.

40) *Ibid.*, p. 16.

41) ローマ書 7 : 18

42) *The First Forty-Nine Stories*, p. 353.

この空しさと闘いながら耐えしのび、生きていかねばならない義務があるのである。それは人間のもつ宿命とも言うべきものである。誰でも実際にできるやり方に従って自分にやれることをしなければならぬのである。⁴³⁾

この空しい人生を耐え忍びながら自分の足で歩むということは、Hemingway の全編を貫く彼の人生観であって、その間に少しでもその苦しみをごまかす阿片があってはならないのである。その意味で、‘Religion is the opium of the poor.’⁴⁴⁾ という言葉も出てくるわけである。人間のいとなみが空しいという考え方は、決して反キリスト教的なものではなく、むしろキリスト教こそ人間のいとなみの空しさを強調してきたと言ってもよいであろう。唯、Hemingway は、このように人生の空しさを認識したのち、宗教が、その人生の厳しさをごまかす形において関与してくることに大いに反撥したと言えるであろう。それは又、保守的な Oak Park のもつ宗教的楽観主義に対する反撥でもあろう。人間は、人間の現実をしっかり足をつけて立たなければならない。そして人間は、その内在的な不条理に耐えるべきものである。従来の安易な形での宗教の関与は許さるべきではない。迫ってくる艱難には雄々しく立ち向かわなければならない。というのが彼の持論であると考えられる。そして、このような人生の把握の仕方の中には何ら反宗教的な要素は認められない。

‘God Rest You Merry, Gentlemen’ の16才の少年の話も、或る意味で、宗教の歪みが浮彫りにされ強いアイロニーが表現されている。問題は、この少年が、たまらない悩ましき (that awful lust) を解決するために、医師に去勢をたのむことである。少年にとって、この抑え切れない欲望は、‘It’s a sin against purity.’⁴⁵⁾ であり、又、‘It’s a sin against our Lord and Saviour.’⁴⁶⁾ である。

そして、医師にとっては、このことは何ら問題ではなく、人間として自然なことであり、それを

このような形で思い悩む少年こそ、‘a goddamned fool’⁴⁷⁾ であると考えられる。

ここには明らかに歪められた宗教の影響が批判されており、この少年は、クリスマスの日に自殺してしまうのである。作者にとっては、この少年も又、パウロが吐露した人間の苦悩を脊負って人生の道程を悩みつつ歩まねばならなかった筈である。16才のこの少年の問題は、‘Saint’s Rest’⁴⁸⁾ と呼ばれた旧幣な Oak Park にその少年時代を送った少年 Hemingway 自身の問題でもあったのではなからうか。Hemingway は、従来の、とりすました宗教的倫理道徳に強い反撥を示していたことは明らかである。宗教は逃避の場になってはならないのである。その意味で、従来の形における宗教を否定していると言い得るであろう。しかしながら、これとても彼が宇宙の創造主を否定し、無神論者になったという証明にはならない。Mungo Park の経験を揶揄し、又、Anselmo の口を通してこの世の中に神はあるものかと言わせてはいるが、冷静に考えるならば、信仰の有無を問わず、人間凄惨な戦いの場を経験し、目撃した者にとって、このような素朴な疑問の起きない者があるだろうか。

‘To-day is Friday’ も又、本稿の主題に沿って考えると興味あるものである。三人のローマ兵士が会話を交わしているのであるが、第一の兵士は、繰返し十字架にかかったイエスが立派であったことを感慨深げに語っている。Hemingway のイエスに対する認識が如何なるものであったかを知る手掛りとして興味深い。Hemingway にとって、十字架にかかるべき運命をもって生れた人間イエスの歩んだ道、又その人生態度は、理想に近いものであったと考えられる。イエスが、十字架の苦難に喘ぎながら、自分の使命の為に雄々しく死ぬその姿は、Santiago の原形として理解することが可能である。現代のキリスト教界において、人間イエスが大きな脚光を浴びていることと思えば、ニーチェが神の死を宣言して以

43) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, p.15. ‘Every one has to do what he can do according to how it can be truly done.’

44) *The First Forty-Nine Stories*, p. 450

45), 46) *Ibid.*, p. 366.

47) *Ibid.*, p. 366.

48) *The Writer’s Art of Self-Defense*, p. 4.

来、キリスト教界の変遷の中で、Hemingway も又、従来のキリスト教を彼なりの現代的把握の仕方でもらえていたと考えることができる。

Hemingway の関心は、この人生を徹底的に生きるという点にあったと言えるだろう。そして彼にとっては、イエスは別として、この世の具体的な範例として闘牛士をあげるのである。Jake は、Cohn が、‘I can't stand it to think my life is going so fast and I'm not really living it’⁴⁹⁾ と言ったのに対して、‘Nobody even lives their life all the way up except bull-fighter.’⁵⁰⁾ と答えるのである。

The Sun Also Rises において、Jake はカトリック教徒として描かれている。Orsay 駅から Bill と一緒に汽車に乗った Jake は、自分がカトリックであることを言い表わす。⁵¹⁾ 彼は又、Pamplona で寺院に入り祈る。いろいろ思いつくままに祈るが、途中眠くなったり、雑念が入ったりで恥かしくなり、そういうカトリックであることを残念に思う。⁵²⁾ 彼は、カトリックは素晴らしい宗教だと思い、敬虔な気持になり、次の機会もそうなるように望むのであった。Bill が Jake に対して、‘Are you really a Catholic?’ と問うのに対して、彼は、‘Technically.’⁵³⁾ と答える。彼は、自分の信仰の具体的な内容についての説明は避けている。このことは、厳密に言えば信者だが、伝統的な意味からは、ややはずれる面もあることを意識して説明を避けたのかもしれない。⁵⁴⁾ 彼は、Pamplona で何回も教会へ行く。Brett も一度一緒に行った。彼女は、San Fermin の教会を見た時、祈る気になって会堂へ入って行く。しかし、祈りはあまり成功しなかった。彼女は、教会では苛々して、宗教的な雰囲気にはひどく駄目なことを告白する。⁵⁵⁾ Jake は、彼女に、‘I'm pretty religious.’ と言い、祈りの効果について

も肯定的な返事をする。⁵⁶⁾ San Fermin の祝祭は、本来宗教的な祝祭なのである。Hemingway は、このことを、‘San Fermin is also a religious festival.’⁵⁷⁾ と、さりげなく書いているが、この言葉は奇妙な重みをもって読者にひびいて来る。

この作品は、Hemingway の虚無感がもっともよく表わされている作品として扱われて来たが、登場人物達は、唯虚無的な背景の中で、刹那的な快楽を追っているばかりでなく、それと平行して、何かを掴もうとして真剣に求めているグループであることに気がつく。人間というものは、得られないものを欲しがらるものだという Jake の言葉は、⁵⁸⁾ 全体の諦観を示してはいるが、彼等の内には、それでも尚求めざるを得ない何かが存在していることを我々は知るのである。Jake は、カトリックであると言いつつ、尚、真の生命の水を求めて悩んでいるし、Brett ですら、空しいとは知りつつ祈ろうとする。彼等には、多くの人達には神は在るということがわかっていながら、⁵⁹⁾ それで、自分の中で実感として生きて働いてこないというジレンマに陥入っている。

‘You know it makes one feel rather good deciding not to be a bitch.’⁶⁰⁾

と言ったあと、Brett は、それが神の代りのようなものであろうと自からの諦めを示すあたり、求めようとしても得られない焦燥感が見事に描き出されており、悲劇的というより、むしろ、いじらしい人間の姿を見るのである。

彼等は、決して宗教に対して無関心ではおれない。何かを自分のものとして掴みたいと願っている。しかし、この作品の中では、模索したまま解答は得られずに、空しく終わっている。しかしながら、登場人物達が、その為に打ちひしがれているかということ、そうではない。⁶¹⁾ Richard B. Hovey

49), 50) *The Sun Also Rises, The Hemingway Reader*, Charles Scribner's Sons, N. Y., 1953, p. 94.

51) Cf. *Ibid.*, p. 155.

52) Cf. *Ibid.*, p. 163. ‘I was a little ashamed, and regretted that I was such a rotten Catholic.’

53) *Ibid.*, p. 186.

54) 本稿註52) 参照

55) Cf. *Ibid.*, p. 256.

56) Cf. *Ibid.*, p. 257.

57) *Ibid.*, p. 209.

58) Cf. *Ibid.*, p. 111.

59) Cf. *Ibid.*, p. 287.

60) *Ibid.*, p. 287.

61) 多くの研究者達は、この作品中の「健康的な明るさ」を指摘している。

は、次の様に述べて、この作品が、これから長く続く Hemingway の求道の始まりであることを指摘している。

None of the characters has found that life is not worth living. Even Jake, who has most reasons for despair, is far from wrecked. He may have given up his desire to figure out the world, but he has not given up the world.⁶²⁾

To be sure, no one in *The Sun Also Rises* finds a satisfying and enduring love, but at least no one has been destroyed by its lack.⁶³⁾

Jake Barnes as pragmatist has not yet resigned to despair; he is still asking questions.⁶⁴⁾

信仰の問題は、Hemingway のような生いたちを持つ者にとって、決して完全に否定できるものではない。彼は、信仰の問題を自分の納得のいく形でとらえようと努力したのである。

A Farewell to Arms の Henry ですら、
'I had no religion but I knew he ought to have been baptized. But what if he never breathed at all.'⁶⁵⁾ と自問する。根っからの無神論者であり、宗教のない人間が、どうして子供の死産に際して、幼児洗礼の事を大切な問題として考えるだろうか。そして、Catherine の生命が危機にさらされた時、空しい結果に終りはしたが、彼は必死に神に祈った。その祈りは、激しい砲火の中で、「救ってくれたら何でもおっしゃることはいたします。」と、必死に祈る兵士の祈りと共通のものである。⁶⁶⁾

他の多くの個所においても、祈りの行為は無数に出てくる。ここで大切なのは、その祈りがきか

れたかどうかという問題ではなく、Hemingway の作品中、人間が苦難にさらされた時、力の足りなさを感じた時、慰めを求める時、かならず主人公達は祈るという事実である。そして、この祈りの行為は、我々西欧的な宗教の背景を持たない者には、溺れる者が掴もうとする藁ぐらゐの意味しかないが、Hemingway のように、宗教的な色彩の濃厚な家庭に育った者にとっては、単なる藁ではなく、もっと人格的な霊の交りという面から考えられているのである。信仰の問題は、我々が考えている以上に彼の心を支配していたとすることができる。その証拠に、すべての作品の中で、主人公が、何か人生論的な問題を考えたり、論議したりする場面では、かならずといってよい程信仰、神、宗教等の問題が登場するではないか。神秘的なことには飽き飽きすると言いながら、⁶⁷⁾ Jordan は神の問題、罪と贖罪の問題を自問したり、Anselmo と話し合ったりしている。

Anselmo は、これまで自分が目撃してきたような酷いことを、神が在るならば、お許しになるのかと呪うが、そうかといって、彼は神を否定しているわけではない。反対に、彼は世の中の連中に神を信じさせるがいいと言うのである。⁶⁸⁾ 彼の悩みは、先の Jake と同様、信心の中で育っていながら、神がはっきり見えないという点であった。Jordan も、Anselmo の神に対する考え方を笑いとばしはしなかった。彼も真面目に、皆神を求めていることを素直に認めている。⁶⁹⁾ それは又、Jake も同様である。Anselmo の苦悩は、同時に Hemingway 自身のものであろう。Anselmo はいろいろ思い悩んだ結果、結局、この動乱が始まって以来初めて聖母に祈りを捧げるのである。彼の祈りは、男らしく、勇気をもって事にあたることのできるようにという、心から素直な祈りであった。⁷⁰⁾

62) Richard B. Hovey, *Hemingway: The Inward Terrain*, U. of Washington Press, Seattle and London, 1968, p. 72-73.

63) *Ibid.*, p. 72.

64) *Ibid.*, p. 73.

65) *A Farewell to Arms*, p. 329.

66) 本稿註34) 参照

67) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, p. 170.

68) Cf. *Ibid.*, p. 43. 'Let them have God.'

69) Cf. *Ibid.*, p. 43. 'They claim him.'

70) Cf. *Ibid.*, p. 309.

The Old Man and the Sea の Santiago が、キリストの姿を彷彿させることは、しばしば多くの人々によって指摘されることである。しかしながら、この一事をもって Hemingway の信仰を云々することは勿論できないことであって、E. Rovit も次の如く述べている。

I seriously doubt that theological ideas engaged Hemingway's creative consciousness any more deeply than social or political conflicts.⁷¹⁾

Joseph Waldmeir は、彼の論文の中で「老人と海」を論じ、Christian allegory を認めながらも作品の本質は、'Religion of Man' であるとしている⁷²⁾しかし彼とても、orthodox ではないにしても、Hemingway 自身が religious であることは認めている。Benson は、Hemingway の作品におけるキリスト教の扱いは、'... must be considered to be aligned with sentimentality...' ⁷³⁾ と解釈しているが、しかし、彼の作品の中にキリスト教的倫理観があらわれていることは認めている。⁷⁴⁾

IV

先に述べた Hovey は、彼の *Hemingway; The Inward Terrain* の序において、Hemingway を研究するについて最も困難な点は、多くの伝説によって、誤った Hemingway 像がすでに一般に浸透していることであると述べ、更に悪いことには、当の本人自身が、それを喜んでいふしがあることを指摘し、Hemingway は、人のことはよく暴露するが、自分の一般に信じられているイメージについては、自ら仮面をはがそうとはしないと皮肉っている。そして、'If ever a writer had problems over his self-image, he was Ernest Hemingway.' と言うのである。

このことは、特に宗教の問題を考える時に障害となる。Hemingway の場合は、作品の多くに、

自伝的要素が強いので、作中人物が作家自身と重なりあって正しい判断を誤らせる傾向があることを認めなければならない。

彼自身は、自分がカトリック作家と思われたいなかったのだから、自分の信仰を一般に発表したくなかったのだと言っている。Baker の書いている次の個所は、Hemingway の信仰の問題を考えるのに、非常に参考になる。

... he now regarded himself as at least a nominal Catholic.

... For many years, wrote Ernest, he had been a Catholic, although he had fallen away badly in the period 1919—27, during which time he did not attend communion. But he had gone regularly to Mass, he said, during 1926 and 1927, and had definitely set his house in order (his phrase) in 1927. He felt obliged to admit that he had always had more faith than intelligence or knowledge—he was in short, a "very dumb Catholic." He had "so much faith" that he hated to examine into it," but he was trying to lead a good life in the Church and was very happy. He had never publicized his beliefs because he did not wish to be known as a Catholic writer. ⁷⁵⁾

このことは、先述の Hovey の言葉を裏づけるものとして興味あるところである。しかしながら、Hemingway が決して orthodox な信者ではなかったことは確かであった。その為に、教会から顔をしかめられるような行為を幾度か繰返している。彼の関心は、飾らない、素朴な生活を送ることにあつた。Baker は、その点を、'His fundamental program was simplicity itself.' ⁷⁶⁾ と述べている。

先に作品を考察した時にも述べたように、Hemingway の心の中には、我々が作品を通して

71) Earl Rovit, *Ernest Hemingway*, Twayne, New York, 1963, p. 91.

72) Joseph Waldmeir, "Confiteor Hominem: Ernest Hemingway's Religion of Man", Carlos Baker, ed. *Ernest Hemingway: Critiques of Four Major Novels*, Scribner's, N.Y., 1962. p. 145.

73) *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, p. 116.

74) Cf. *Ibid.*, p. 158.

75) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story*, Scribner's, New York, 1969, p. 185.

76) *Ibid.*, p. 185.

知る以上に、宗教的情操が深く刻まれていたと考えてよい。従って Baker も、‘The only way he could run his life decently was to accept the discipline of the Church.’⁷⁷⁾ と述べている位である。

ところが、スペイン内乱の時、カトリック教会が、ファシスト側についたことにより、彼は激怒し、祈ることすらやめたと言われている。⁷⁸⁾ 彼のような直情型の人間にとっては、当然なことであろう。しかし、その怒りはこの世の Catholic institution に対してであって、このことによって彼が直ちに神を否定したという事にはなるまい。このことが一つのきっかけとなって信仰的には不安定な日々を送ることになり、自分の為には祈らないことに決めたとされる。⁷⁹⁾ 1955年4月8日、Buffaloから彼を訪れた若い Fraser Drew という研究家が、自分はカトリックであると言ったのに対して、‘I like to think that I am insofar as I can be. I can still go to Mass, although many things have happened about divorces and remarriages.’⁸⁰⁾ と述懐している。更に、バスク人の Don Andrés 神父のことを話し、‘He prays for me every day, so I do for him. I can’t pray for myself any more. Perhaps it is because in some way I have become hardened.’⁸¹⁾ と述べている。

Hemingway の晩年、Gary Cooper が訪れ、彼が妻の説得に負けてカトリックになったと言った時のことを、Baker は、‘Ernest was sympathetic. He had done the same thing thirty years earlier, and he still “believed in belief.”’ と記している。同様のことは、Hotchner も *Papa Hemingway* の中で言及し、Hemingway が、自分自身は救いようのない落伍者のカトリックだから何とも言いようはないが、しかしそれでよかったのではないかと言ったと述べている。⁸²⁾

弟の Leicester は、父親の葬儀に際して、兄

の Ernest が自分に言いかけた言葉を次のように記している。

If you will, really pray as hard as you can, to help get his soul out of purgatory. There are plenty of heathens around here who should be ashamed of themselves. They think it’s all over, and what they don’t seem able to understand is that things go right on from here.⁸³⁾

父の死に際して、Ernest は父親の冥福を神に祈る心のゆとりを十分に持っていた。しかし、彼の Oak Park に対する反感は上文中にも明らかである。

かくして、Hemingway 自身と宗教の問題は、作為的な Hemingway 像に左右されて、軽々しく否定的な結論を出すことは避けるべきである。彼は、決して伝統の枠に入る人間ではなかったし、又、信仰の点についても、orthodox な立場から見れば、型破りな人間であった。しかしながら、価値の転換期にあって、激しく在来の価値に対して反逆を示した彼も、幼い時に知った創造主まで根底から否定し去ることはできなかった。神の存在を彼は信じ続けた。彼の作品の主人公達も、このことを認めるのにやぶさかではなかった。或いは、少なくとも否定しようとはしなかった。又、ある時には真剣に求めた。彼自身は、伝統に反抗しながらも、種々の体験を通して、この問題がどのように人生に関わるのが最も良いかを追求し続けたのである。結局、彼の世界観を最もよく表現しているのは、「伝道の書」であろう。彼は、永久に変わる事のない創造主の支配する宇宙の秩序を信じていた。一方、人生は、長く生きても80年、考え方によれば短いものである。彼の関心は、このゆるされた期間を如何に生きるかということであった。‘But you have no house now, he thought. We must win this war before you can ever return to your house.’⁸⁴⁾ と、

77) Ibid., p. 333.

78) Cf. Ibid., p. 333.

79) Cf. Ibid., p. 449.

80), 81) Ibid., p. 530.

82) Cf. A.E. Hotchner, *Papa Hemingway*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1966, p. 197.

83) *My Brother, Ernest Hemingway*, p. 111.

84) *For Whom the Bell Tolls*, p. 187.

Anselmo が考えるように、人生には安住の地はないのだ。安住の地に着く前に闘わねばならないというのが Hemingway の実感でもあろう。キリマンジャロの霊峰に空しく迫まろうとした豹の姿が象徴的に我々の脳裏にうかんでくる。

Robert Jordan は、我々の人生は、今日から明日、そして再び今日から明日とめぐりめぐってくるのであるから、今という時を感謝して過すのが良いのだと考える。⁸⁵⁾それが人間にゆるされている唯一の道であろう。それは同時に、「明日のことを思いわずらうな、明日は明日みづから思いわずらわん。一日の苦勞は一日にて足れり。」⁸⁶⁾という聖書の精神でもある。

Joseph Waldmeir は、Hemingway における神は、内在的なものではなく、人間のいとなみとは無関係な形で存在するものであると言っている。⁸⁷⁾つまり、人間は、自分の責任は自分でとら

ねばならず、そこに Hemingway が 'Religion of Man' を高揚した所以があると言うのである。⁸⁸⁾けれども、Hemingway 自身は、人間が弱い存在であることを最もよく知っていた人物であった。彼の描く主人公達は、決してスーパーマンではなく、破れかぶれの人間であり、その打ちひしがれた中に耐え忍ぶことによって、わずかな人間の尊厳を全うしようとしていた人々であった。彼は実生活においては、迂余曲折はあったが、悩みつつ信仰の遍歴を経て、世を去った。

1954年、スペインの北部 Burgos の町を訪れた時、大きな寺院に立ち寄り祈禱を捧げた。寺院を去る時、彼は、'I wish I were a better Catholic.'⁸⁹⁾と述懐したと言われる。筆者は、ここに、弟 Leicester の言う 'a child of God besieged by a welter of familial and personal problems'⁹⁰⁾の真実な姿を見るのである。

85) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, p. 160.

86) マタイ伝, 6 : 34

87) Cf. *Ernest Hemingway : Critiques of Four Major Novels*, p.145

88) Cf. *Ibid.*, p.149.

89) *Papa Hemingway*, p.128.

90) 本稿註11) 参照